

平成28年熊本地震を経験して思うこと

櫻井聖大[†] 深水浩之 山田 周
橋本 聡 高橋 毅2021年10月23日～
11月20日Web開催

IRYO Vol. 77 No. 3 (185-188) 2023

要旨

2016年4月14日に発災した平成28年熊本地震においては、国立病院機構熊本医療センター（当院）の被災は比較的小規模にとどまり、ある程度の病院機能を維持することができた。そのため、災害拠点病院として職員総動員で対応に当たり、多数の傷病者や病院避難となった患者の受け入れを行った。スタッフの疲弊が深刻な中で継続した患者の受け入れを行えたのは、発災直後より災害派遣医療チーム（Disaster Medical Assistance Team: DMAT）をはじめとした、さまざまな災害医療チームのサポートがあったからである。その中でもとくに、本来は医療救護活動を行う国立病院機構初動医療班に、病院支援を行っていただいたことは、非常に有用であった。また当院では毎年、厳しい状況を想定した災害訓練を行っており、平時からの災害訓練の重要性を再認識することができた。訓練を基に、事業継続計画（BCP）をより現実に沿ったものに改訂していくことも重要であると感じた。

南海トラフ地震の際には、国立病院機構の多くの病院が被災することが予想されている。病院支援は初動医療班の本来の業務ではないものの、同じ機構内からの支援は非常に重宝される。被災しながらも災害拠点病院として多くの患者の診療を行う必要がある国立病院機構の病院には国立病院機構初動医療班が病院支援を行い、病院避難が必要となる病院にはDMATが主体となった病院避難を行うような、役割分担・柔軟な対応が重要ではないかと思われる。

キーワード 国立病院機構初動医療班, 病院支援, 病院避難

はじめに

国立病院機構熊本医療センター（当院）は、病床数550床を数える総合病院であり、平時より救急車を多数受け入れる救命救急センターである。2016年4月14日（木）に発災した平成28年熊本地震においては、幸いにも当院の被災は比較的小規模にとどまり、ある程度の病院機能が維持された。そのため、災害拠点病院として職員総動員で対応に当たり、多

数の傷病者や病院避難となった患者の受け入れを行うことができた。スタッフの疲弊が深刻な中で継続した患者の受け入れを行えたのは、発災直後より災害派遣医療チーム（Disaster Medical Assistance Team: DMAT）をはじめとした、さまざまな災害医療チームのサポートがあったからである。その中でもとくに、本来は医療救護活動を行う国立病院機構の初動医療班による病院支援は、非常に有用であった。

国立病院機構熊本医療センター 救命救急・集中治療部, [†]医師
著者連絡先：櫻井聖大 国立病院機構熊本医療センター 救命救急・集中治療部
〒860-0008 熊本県熊本市中央区二の丸1-5
e-mail: toshihiro1108jp@yahoo.co.jp
(2022年3月10日受付, 2022年4月14日受理)

What I Think after Experiencing the 2016 Kumamoto Earthquake
Toshihiro Sakurai, Hiroshi Fukami, Shu Yamada, Satoshi Hashimoto, Takeshi Takahashi, Department of Emergency and Critical Care Medicine NHO Kumamoto Medical Center
(Received Mar. 10, 2022, Accepted Apr. 14, 2022)

Key Words: National Hospital Organization's Initial Disaster Medical Team, hospital support, evacuation of hospital